童話『杜子春』論　1
「読み聞かせ教材」としての理論構築

小西　律

“Toshisyunn” Theory　No. 1
― Theory structure as the material for story teiling ―

Ritu　Konishi

はじめに

大正９年、芥川龍之介は雑誌「赤い鳥」に『杜子春』を書いた。その末尾において芥川は、「何(なに)になっても人間(にんげん)らしい正直(しゃうじき)な暮(くら)しをするつもりです[1)]」と杜子春に語らせている。本論は芥川が「何になっても人間らしい正直な暮しをするつもりです」と記したこの一点を象徴的に、かつ大正期の思潮の流れの中で捉える。さらに読者の対象を児童においた芸術的な童話雑誌「赤い鳥」に掲載された作品であることに重きをおき、芥川から児童への「物語の贈り物」として考察するものである。また、子ども達に読み聞かせる作品の教材として、物語に込められた日本的な心情も捉えたい。

当時文芸評論家と見なされていた宮本顕治は、昭和４年、「改造」８月号中、「敗北の文学」で「『杜子春』『蜘蛛の糸』『白』等の童話は、いかに氏が一階級の道徳律を越えることの出来なかったモライリストであったかの證左である[2)]」と述べる。これは芥川の自死の後に書かれたものであるが、その後、非合法の活動家の道を歩む宮本顕治という人物の生き方を示す透徹した論文とみることができる。

本論文は、文学史的な評価とは異なる次元の捉え方で、この作品を考察したい。このことは、日本的な特性と言う曖昧な言葉で多く集約されることを最初に記述しておく。また、童話『杜子春』が世に出た時代の理解として所謂、芸術至上主義、共産主義、人道主義等の作品を同一の俎上で解釈したことも了解を頂きたい。

１．その後の『杜子春』の発生

「赤い鳥」の大正９年の７月号に芥川龍之介は童話『杜子春』を掲載した。その「赤い鳥」の巻末に（「赤い鳥」第二周年記念事業）、「この会が成り立ちますと、世間に出るよい本は、少なくとも千部だけは直ちに引き受けますので、好良な本の出版に向ってかなりの安全を保証し得るわけになりまして、社会上又別の大きな役立ちになる筈です。[3)]」と「『赤い鳥』特選圖書購買會」の趣旨が示されている。後年の読書サークルの方法であり、現在のオンディマンド出版のはしりと言え、「赤い鳥」が運動して児童に良質な芸術環境を提供する意図が読み取れるのである。また「自由畫、綴り方、自作童謡募集」の案内には、「自由畫とは手本を見ないでかきたいものを勝手にかいた畫です。何でかいてもかまひませんが、ぼんやりした畫は版になりませんから、はっきりおかき下さい。綴方、童謡

もどんな紙へ畫いても勝手です。一々何縣何郡何小學校と畫くこと。學校にゐない人は年を畫いて下さい[4]」と児童が想像力を自由に発揮できる場の提供を心掛けている。これも後年の綴り方教育につながる運動と見ることができる。『杜子春』が童話と「赤い鳥」に記され『三つの寶』でも「童話」と記されていることの意味は、このように読者である子どもの心に清新な感性と芸術的な香気を届けたいとの思いにより書かれたと考えられる。

『杜子春』の最後に、泰山の南の麓の桃の花咲く家を杜子春に住むように話す箇所がある。芥川龍之介の師である夏目漱石は、『草枕』の冒頭で「兎角に人の世は住みにくい。住みにくさが高じると、安い所へ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟った時、詩が生まれて、画が出来る[5]」と近代社会の息苦しさに絶えられず精神的桃源郷への離脱を試みながらも出来ないことを悟ると、「越すことのならぬ世が住みにくければ、住みにくい所をどれほどか、寛容（くつろげ）て、束の間の命を、束の間でも住みよくせねばならぬ[6]」と続ける。自身が生きている現代社会と真正面から対峙した漱石と異なり芥川は唐の時代と仙人を設定することで、杜子春を仙郷である桃源郷に暮らすであろう可能性を読者に想像させる。漱石は晩年まで人間の存在を凝視することで形作られた彼の苦痛に満ちた小説群とは相対する脱俗の存在に筆、また絵筆を染めることで精神の均衡を保つことを試みたといわれる。『漱石書画畫集』に所収された南画、俳諧、漢詩の世界は精神の苦痛を散じた道具としても見ることができる。漱石山人と記された南画に限り鑑賞しても脱俗の世界への憧れが画面に溢れている。紅葉が紅葉山人と号するごとく明治の作家の多くが山人の号をもち超俗の筆を執っている。

前記の宮本の評論「敗北の文学」では「山人」という言葉により醸し出される「文人」を取り上げている。「文人」の分析、論評から「山人」の号を用いる作家への厳しい批判を展開する。それは宮本顕治等が求めた文芸雑誌「戦旗」を代表とする無産者の芸術運動とは異質の領域であり、必然的に滅びゆく作家と作品を規定しえるものであったからである。「『文人』といふ古典的な文字の相應はしいとされてゐた芥川氏の住んだ世界は、永い間、私にとって、可成縁遠いものに思へてゐた[7]」と書いているが、宮本が言う「文人」を「文人趣味」として見れば、価値観の乖離は明らかである。現実の矛盾と病根を解決するため、それとはまったく異なり、新しい価値による社会の構築をしなければならないと規定した場合、漱石の隠者的側面とジレッタント的な世界はやがて厳しい党生活者の道を歩んだ宮本顕治の世界とはまったく別な次元のものになっていくのである。

芥川もまた、都市の「粋」も「病根」も含め爛熟した江戸文化の伝統（例えば大田蜀山人のごとく）の感情と思考を色濃く継承し、洗練された嗜好の枠を通して生きた存在としてみるならば、この「文人」の指摘は当を得ていると言えよう。

それより早く大杉栄により大正元年に創刊された「近代思想」の 11 月号の巻頭に宮本論文と同質な文を見ることができる。「むだ花」と題された文で大杉は栄の名で「自然力に屈服した生のあきらめ、社会力に屈服した生のあきらめ、かくして生の闘ひを回避したみのりなき生の花は咲いた。宗教がそれだ。芸術がそれだ。むだ花の蜜ばかりあさる虫けらの徒[8]」と厳しく批判する。この考えの延長に『杜子春』をおいてみれば宮本論文がもつ時代の必然性を良しとすることはできる。たしかに『杜子春』には、そこはかとなく漂う諦念、隠遁、詠嘆等の感性が表現されている。これらは現代の生活の中にも持ち得ている感性であるが、言葉の表面的な意味が示すほどには大杉の言うような不健全な精神を持

っているとは思われない。むしろ四季が豊かな国土に住み、時折り霞む風土に暮らす私達の感性を背景とした観念であるともいえる。志賀重昂は『日本風景論』で観念の論理化、記号化を試みたもののあまりにも困難であったのは、曖昧模糊とした風景とそこに育まれた私たちの存在であった。この曖昧模糊とした領域の範疇の諦念、隠遁、詠嘆等を、直截に日本的、東洋的と論じることには無理があるが、私たちの生活の中での意思決定に大きく影響を与えていることは確かである。その私たちの精神野とでも表現できるこれらの領域に西洋的近代が持つ、つきつめた厳密な価値の概念と論理性を持ち込むなら、表面的には抗うことがなくとも表面下で、日本的観念が醸成されていると言えよう。危機が訪れた時の杜子春は前述の如く仙人である鐵冠子に「何になっても人間らしい正直な暮しをするつもりです」と述べる。鐵冠子は「その言葉を忘れるなよ。ではおれは今日限り二度とお前には逢はないから」と言いながら去ろうとして振りかえり「をう幸ひ今思ひ出したがおれは泰山の南の麓に一軒の家を持ってゐる。その家を畑ごとお前にやるから早速行って住ふが好い。今頃は丁度家のまはりには桃の花が一面に咲いてゐるだらう」と愉快そうにつけ加え、杜子春を待つ世界を読者に暗示し、誘い込もうとするのである。

次に、この鐵冠子が述べる「桃」を象徴とする東洋的、日本的な思想を核に超俗、脱俗からの論を試みる。

2．都会的なものに反して

青年の杜子春が仮に長寿をもって後年にその暮らしを他者から問われることがあるとしたならば、彼はどのように応じるであろうか。それは李白の詩のように答えるのではないか。桃は東洋の文化のなかでも様々な形で花開いている。『古事記』を中心とした上代文学にそれを見ることもできるなら、明治期の教養としても見られる。桃源郷の象徴として桃をみると李白の「山中問答」に青年の杜子春が感受していた俗世感と、それより逃れられた心境とも読むことができる。

問余何意棲碧山	余に問う何の意ぞ　碧山に棲むと
笑而不答心自閑	笑って答えず　心自のずから閑なり
桃花流水杳然去	桃花流水　杳然として去る
別有天地非人間	別に天地の人間に非ざるなり

どんなつもりで奥山にすむかと人はたずねるが、わたしは笑って答えない。なんともいえないよいきもち。

桃の花びら水に浮き、ずっとはるかに流れ去る。また、格別の天地です。人里はなれた世界です。（武部利男）[9]

これらの脱俗、超俗な境地は文人趣味として田舎暮らしを生き方に選ぶ人たちの現代にまでつながる精神の伝統の一つとみなすことが出来る。四書五経、老荘の教えに親しみ李白の詩を日常の嗜みとするのは明治、大正の教養あるものには常識の範囲であった。またその教養を基に、東京の下町で育ち落語、講談の話芸を始め新内、長唄など数多の歌舞音曲のなかにある物語性を自然に享受した芥川の内奥にある消すことの出来ない「筋」とい

うものの展開、表現方法であった。童話雑誌「赤い鳥」を初出誌とする『杜子春』は話者と聞き手が終局のない永遠へと連る物語空間的な要素を多分に持った作品なのである。

３．都会的消費生活に反して

物語の中で杜子春は「元は金持の息子でした」が、「今は財産を費ひ盡してその日の暮らしに困る位憐れな身分になってゐるのです」という境遇にいる者として描かれる。夕陽を浴び杜子春の前に立った老人（鐵冠子）の言葉に従って行動し、二度金持ちとなり三度、貧乏となる。金持ちの家に生まれた杜子春は、なぜ洛陽の西の門にぼんやり立たねばならなかったのか。それは、老人から二度の機会を与えられながらも、贅沢三昧な生活を送るうちに財産を蕩盡したからである。そのような杜子春に金持ちになる三度目の機会を老人が授けようとするが、「いや、お金はもう入らないのです」と答える。（このカギカッコ「」は掲載誌「赤い鳥」の『杜子春』では記されているが単行本『三つの寶』に所収された『杜子春』には記されていないため筆者が便宜的に記した）「なに贅澤に飽きたのぢゃありません。人間といふものに愛想がつきたのです。人間は皆薄情です」と仙人の鐵冠子に語るがそれは、金持ちの家に生まれた世間知らずの杜子春という青年が狡猾な世間の餌食となり果てた言葉ではなかったか。そのことには物語は一切触れていない。仮に杜子春が世間擦れした、身過ぎ世過ぎの経験を蓄積できる能力、性格を持ち得ていれば一度は親の財産であり二度は運により手にした財産を全て遣い尽くすことはなかったのである。もっとも仙人の鐵冠子はそのような杜子春であれば前には姿を現したりはしないだろうが。

杜子春にとり人生の始まりは人間は素晴らしいものであったのであろうと想像できる。それは、親の財産が背景にあることにより、もたらされた人と人との関わりであった。ある間はもてはやされ、無くなる同時に見向きもされなくなると世間から裏切られた経験を持つ杜子春のなかに財産意外の新たな関わりを望む気持ちを潜ませていると読むことができる。私であれば、最初に財宝を掘り出したら大切にして贅沢はしない、と考えることは妥当である。しかし物語の杜子春はそのようにしなかった。最初も二度目の財産も贅沢に使い果たしてしまうのである。ここに、私であればそうしないのに、という気持ちを聞き手に自然と起こさせる口承文芸としての昔話の要素も生きている。

「私が大金持になった時には、世事も追従もしますけれど、一旦貧乏になって御覧なさい。柔しい顔さへもして見せはしません。そんなことを考へると、たとひもう、一度大金持になった所が何もならないやうな気がするのです」と杜子春は語ることで、目前の老人が仙人であったことに気が付くのである。金は物でしかないと気付くことから仙人になりたい願望へと変化を見せる。仙郷に生きることにより人事の瑣末な駆け引きから逃れたいとの切望が杜子春のなかに浮かぶ。これは「人間苦」からの解放の希求につながると位置づけできる言葉と捉えることができる。個と個がその個であるからこそ結びあい、慈しみ合う関係への憧れである。芥川はこの人間の解放という二点の現実を抱えていたと考えられる。一点は、人生の悲惨さから精神的、肉体的な独立を目指すものであった。芥川の師である漱石が『草枕』において「不人情」ではなく「非人情」であると書いた境地である。またもう一点は階級からの人間の開放闘争である。搾取する階級から搾取された階級が様々な方法をもって「生きる権利」を本来、人間それぞれに備わっていたものと規定し奪取

する闘争である。そのどちらにおいても世俗の感性からの離脱が求められる。『杜子春』が書かれた当時の社会主義運動の流れは明治初期の自由民権運動とキリスト教が重なり広がることから始まり、キリスト教社会主義と無政府主義そして、社会主義を通過し科学的社会主義への道程の中にあった。

大杉栄が大正元年に発刊した雑誌「近代思想」に多くの論文と作品、雑文を発表した荒畑寒村は「運動史上の暗黒時代」と評している。それは土岐哀果の「日本に住み　日本の國の言葉もて　云ふは危うし　わが思ふこと」という断章からも捉えられるところである。

発行者の大杉栄は同２号の巻頭において「道徳の創造」と題し、「社会の或る少数者の間に、その道徳観念が全く変わって了ふ時代がある。誠に危険な時代である。曾ては最も道徳的であるとせられてゐた事が、今度は反対に、最も不道徳的な事であるとせられて来る。従来尊敬せられ神聖視せられてゐた慣習だの、伝習だの、又は或る一階級の利益の為にのみ作られていた道徳だのが、一切放擲せられて了ふ。そして所謂不道徳的な行為をする事を以て、自らに対する及び世間に対する、最高の義務であると認めるやうな人が出て来る。誠に危険な人物である。けれども史家の教ふる所に拠れば、此の危険なる時代に於て此の危険なる人物によって、歴史は常に向上の一転化をするのだと云ふ。道徳を創造するんだ。幸い此の種の時代に生れて、此の種の人物の一人に数へらる。誠に千載の一遇である[10]」と主張するが、ここには、価値観を逆転させる熱意が込められているとみることができる。

二点の問題、これは「個人」として旧套たる世俗からの超越であり、「階級観」としては社会への先鋭的な、昭和前期という社会情勢の中で捉えるならば非合法的な関わり方であることは論をまたない。あえて適切な言葉を用いるとすると「階級闘争（革命）」に参加することである。

童話『杜子春』では醜悪な人間とのみ関わり人間そのものをも嫌悪する杜子春が人間そのものを否定し、仙人である鐵冠子に非人間的な仙人への飛躍と変貌を想い願うのである。仙人の鐵冠子は杜子春とともに飛翔してきた仙郷の入り口で杜子春に「多分おれがゐなくなると、いろいろな魔障があらわれてお前をたぶらかさうとするだらうが、たとひどんなことが起らうとも、決して聲をだすのではないぞ。もし一言でも口を利いたらお前は到底仙人にはなれないものだと覚悟をしろ。好いか。天地が裂けても黙ってゐるのだぞ」と語る。人間界と全く隔絶した領域へいくための覚悟が試されているのである。普通の人間が持つ温かな情愛との永訣を意味するのであるが、世俗、塵埃を嫌悪する杜子春はそのことに気がつかない。藤田の「昭和は八年を中心とした転向状況」を見ると、藤田はある思想運動の転向者の言葉を引用している。「『血につながる関係は、あまりに親しすぎて、父母や弟妹の愛と云うものが深くわからなかったのが、獄中における冷静なる内省によってしみじみ味はされて行くのであった』遮断された独房に座って想うことは『年をとった父が車を引いて、どこかの崖から落ちぬであろうか』という不安だし、また『涙に濡れてやつれた母の顔』であった[11]」この言葉の主体者の心情を藤田は「不安まじりの郷愁[12]」と表現する。この世の苦しみ、迷いから脱し仙人への願望と思想運動とを直接に結びつけることには困難があるものの、その内奥に横たわる感性は共通するのではなかろうか。その感性をこそ宮本は「敗北の文学」で「いかに氏が一階級の道徳律を越えることの出来なかったモライリストであったかの證左である」と論じたと考えるのである。この感性は昭

和11年の「２・２・６事件」における戒厳司令部が２月29日に、投降を呼びかけ将兵向けに作成したビラ「下士官兵ニ告グ」に見受けられる。それには「オ前達ノ父母兄弟ハ國賊トナルノデ皆泣イテオルゾ」（原典は兵の識字能力に合わせ総ルビである）多くの人間が父母兄弟、地域との情愛のつながりの中で生きており、その父母とのつながりから投降を促すのである。

地獄の鬼から鞭をうたれる苦しみのなかで母親の声が杜子春の心に伝わってくる。その言葉の中に同じ意味、感情を読み取ることが出来るのではないか。「心配おしでない。私たちはどうなってもお前さへ仕合せになれるのなら、それより結構なことはないのだからね。大王が何と仰つても、言ひたくないことは黙って御出で」と母は諭す。仙人の鐵冠子が「好いか。天地が裂けても黙ってゐるのだぞ」と言った約束どおりには出来ず、精神的な苦痛に絶えきれなくなり、「お母さん」と出た一言により杜子春は、仙人への道を自ら閉ざしたのである。しかし、仙人の道は閉ざされても、また新しい道が用意されていた。それは「土」への道を開いていくことであった。杜子春はその後どうなったかという問いの答えとして準備されていると考えられるのである。

４．土の認識

大正７年に神奈川県足柄下郡小田原町で発行された雑誌「民衆」の創刊１月号の表紙に、「われらは郷土から生まれる。われらは大地から生まれる。われらは民衆の一人である。日本の民である。われ自らである。われらは自由に創造し。自由に評論し。眞に戰ふものだ。われらは名のない少年である。しかも大きな世界のために、日本のために、藝術のために立った。いまや鐘はなる。われらは鐘樓にたって朝の鐘をつくものだ[14]」とある。これは、民衆と大地が結び付けられている言葉であり、疲労し倦怠を感じる都会生活の虚飾から離れ人間の無垢な心情をありのままに表現している。詩誌としての「民衆」の作品は粗削りであるからこそ、読者に共感を与えたのである。創刊号に掲載されている「畑中の家族」と題された花岡謙二の詩は次の通りである。「男が鍬を振ってゐる、女が粟を刈ってゐる、その傍らに、小供があかんぼを背負って立ってゐる。秋の大きな夕日が　これらの畑中の家族の上に赤々と輝き、そして、武蔵野いっぱいにひろがってゐる、さいぎるもののない平野のまんなかで、くる來る日も來る日も、太陽に導かれて働く彼らの生活こそ、まことに尊貴なものではないか。土は美である、土は眞である、土は力である、そして、あらゆるものの生命の母である、彼等は單純と従順とをもって土に對し、日に對し、或は雨に對し、風に對してゐる。自分はその美しさを、ここの畑中の家族に於いて見た、これほど自然と直接な、これほど力強く、これほど正しい生活が何處にあらうか、更に土を信じ、土を愛することによつて、彼等の幸福は一層増進するであらう。　秋の大きな日が沈む、手を止めて見よ、秋の大きな日が沈む。（大正六年十月廿四日作）[15]」

農地で家族が一心に農事にいそしんでいることを歌っている。素朴な記述からは昭和前期に創作されるプロレタリア文学または農民文学の階級闘争の道具としての目的は感じられない。むしろミレーの「種まく人」や「落ち穂ひろい」を思わせる作品となっている。

童話『杜子春』に「一日の中に洛陽の都でも唯一人といふ大金持になりました。…　贅澤を――書いてゐては、いつになってもこの話がおしまひにならない位です」と表現され

る都会的な消費生活と対極に位置する記述でありながらも、最後には「何になっても、人間らしい正直な暮しをするつもりです」と杜子春に云わせる感性とを重ねて読み取ることができる。濡れ手で粟の如く容易に手にした財宝により非生産的で享楽的な都市文化を享受していた杜子春の意識改革の目覚めである。この目覚めを大正期の土につながる白樺派などの文芸思潮や民芸運動を合わせて考えると杜子春のその後をイメージすることができる。杜子春が仙人の鐵冠子から授けられた泰山の南の麓にある、桃の花咲く畑は超俗であり脱俗であるが杜子春以外の人間を遮断しているようには読むことができない。人間と人間がそれぞれの価値を認めながらの暮らし方を潜在させているとも見られるのである。杜子春は地獄で鬼に身をうち砕かれながらも自分へ無償の愛を注ぐ父母の凄惨な姿に「お母さん」という一言を発することで仙人への道を自ら閉ざしたことは前述の通りであるが、ここで新たに土に生きるという道が開かれるのである。

これまで文化の中枢は都会の主に開かれた平地にあった。しかし都市だけでなく、地方の平地、また、平地の前の海、背景にある山地等それぞれの地には、文化が綿々と伝承されて来たことが例えば、柳田の『山の人生』、『海上の道』には書かれている。一般の人間の生のなかに人生の真理を見ようとした自然主義の文学者と親しかった柳田国男の視点が明らかに示されているものの、都会のみを文化の創造の磁場としてきたこととは全く異なるものであった。。日本文化の基礎を従来にない視点から捉える動きが活発化していることが窺え、芥川は杜子春が桃の花咲く村での土に生きる素朴な暮らしに向かうだろうことを暗示させる。

このように見てくるならば、芥川は李白の詩の世界のごとき自然のなかで暮らす豊かさ、また搾取する者もいない平等を希求する社会、そうして土とともに伝承される常民文化の価値のなかでの生活などをそれぞれに結びつけることができるものとして童話『杜子春』を創作したと考えられる。

5．今後の展望

大正７年７月に刊行された雑誌「新しき村」７月号で武者小路実篤は無車の筆名で、「新しき村の小問答」と題し、新しき村の運動を説明する。新しき村は、大正期の日本の社会で軋轢を最小限にとどめながらも「出来るだけ人間らしい関係のもとに自分達は生きられるだけ生きやう[16]」とする実践活動であり、これは杜子春が言うところの「人間らしい正直な暮し」と重なるものである。そうして、杜子春が「私が大金持になった時には、世事も追従もしますけれど、一旦貧乏になって御覧なさい。柔しい顔さへもして見せはしません」と仙人、鐵冠子に訴えた人間不信への答えも見られる。「新しき村というのは、一言で云えば皆が協力して共産的に生活し、そして各自の転職を全ふしやうと云ふのだ。皆がつまり兄弟のやうになってお互に助けあって、自己を完成するやうにつとめやうと云ふのだ。　…　現社会の渦中から飛び出して、現社会の不合理な歪なりに出来上がった秩序からぬけ出て、新しい合理的な秩序のもとに生活をしなほして見たいと云ふ気もするのだ。つまり自分達は今の資本家にもなりたくなく、今の労働者にもなりたくなく。今の社会の食客的生活よりももっと人間らしい生活と信じる生活を出来るだけやりたいと思ふのだ。…　人間らしい生活と云ふのは、人類の一員としてこの世の中に生活してゆくのに必要

なだけの労働を先ず果して、そしてその他の時間で自分勝手の仕事をしやうと云ふのだ[17]」と。武者小路は「革命家と云われるのはこわいのか。」との問に「いやさうぢやない。さう思ひたいものは思はしておいてもいいが、僕は会社のやうに思はれるのは嫌いだ。僕は建設者だ。新しき芽だ。自分達は新しき家をただ建てる。建てられるだけ方々に建てる。そして其処に入りたく思ふものだけを歓迎する。古い家よりも、もっと人間らしく生きられる新しき家を建てるのが自分達の仕事だ[18]」と答るのである。

次回、「白樺」「新思潮」「改造」「中央公論」等の雑誌、運動としての「青鞜」の論調との関わり、さらに有島武郎の「農場解放」の問題、トルストイの受容と徳富蘆花の思想等からも論の展開を試みたい。また近代の市民の煩悶と取り組んだ精神医学者としての森田正馬の臨床例なども参考にして論の展開を試みたい。

また杜子春が人間の情愛から逃れ難く仙人への道を歩めなかったのに反し既に仙人である鐵冠子は父母への情愛、人間性を超越出来、仙人になりえたのであろうか、という点についても考究したい。

引用文献

1)　芥川龍之介：三つの寶、改造社、（東京）、1928年
本文の引用は全てこれによる。また、「赤い鳥」では、芥川の原稿に主宰者である鈴木三重吉が手を入れていることは周知されている。

2)　村松剛・佐伯彰一・大久保典夫編集：昭和批評体系1宮本顕治「敗北」の文学、103、番町書房、（東京）、1968年

3・4)　赤い鳥：赤い鳥社(東京)、1934年

5・6)　現代日本文学大系17夏目漱石集(一)草枕　：夏目漱石、247、筑摩書房、（東京）1968年

7)　上掲　昭和批評体系1宮本顕治：93

8)　近代思想 8月号　栄　むだ花　：近代思想社、（東京）1927年

9)　武部利男：李白 上 、46、岩波書店(東京)、1966年

10)　上掲　近代思想 2月号　栄　道徳の創造　：近代思想社、（東京）、1927年

11・12)　共同研究　転向　上　藤田省三　昭和八年を中心とする転向の状況　：思想の科学研究会編 、平凡社、（東京）、1978年

13)　上掲　昭和批評体系1宮本顕治：103

14)　民衆 創刊1月号　表紙、民衆社、（神奈川県）、1932年

15)　花岡謙二　：畑中の家族　民衆創刊1月号、（神奈川県）、1932年

16・17・18)　新しき村 第1巻　無車　新しき村の小問答 、不二出版、（東京）、1988年

参考文献

1)　志賀重昂：日本の名著39　日本風景論 、中央公論社、（東京）、1970

2)　柳田国男：山の人生、岩波書店、（東京）、1990年

3)　柳田国男：海上の道、筑摩書房、（東京）、1969年